

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

松尾 康正

主論文の題目

題目 Endoscopic Small-capacity Forceps Increase the Pathological Diagnosis of Gastric Indefinite Neoplasia

（細径鉗子による胃生検では、腫瘍か非腫瘍かの鑑別例が増加する）

および

掲載誌 Turkish Journal of Gastroenterology. 2018 Jul;29:481-487

掲載誌・審査委員名

主査 松田 隆秀

副査 高田 礼子

副査 大坪 毅人

[論文の要旨・価値]

日本胃癌学会胃癌取扱い規約による胃内視鏡生検の Group 分類における Group 2 は、「腫瘍性(腺腫または癌)か非腫瘍性か判断の困難な病変」と定義されている。具体的には異型細胞は見られるものの組織量が不十分、びらんや炎症が強い、組織の挫滅や変性が強いなどで腫瘍と非腫瘍の区別が困難である場合に Group 2 と診断される。そのため、Group 2 は短期での内視鏡生検再検査が必要となり、患者に負担をかけることとなる。著者らは出血等のリスクを避けるためにサイズの小さい鉗子を選択すると Group 2 の診断頻度が増すのではとの Clinical Question の下、使用する鉗子サイズと Group 2 診断の関係について検討した。

（方法・対象）聖マリアンナ医大病院で胃内視鏡生検を受けた例を、標準径鉗子（開口幅 7mm:St 鉗子）を用いていた St 鉗子群（2010 年 4 月から 2011 年 3 月）と細径鉗子（同 5.4mm:Sm 鉗子）を用いていた Sm 鉗子群（2011 年 4 月から 2013 年 3 月）の 2 群に分類。そして両群より Group 2 と診断された症例を抽出し、①Group 2 診断率、②患者背景、③病変の特徴（部位、肉眼型、色調）、④内視鏡医の経験、⑤検体のサイズを後方視的に調査し比較した。また、両群における Group 2 診断例においては再検査の結果も調査した。なお、統計処理には t 検定、カイ二乗検定、G 検定を用いた。（聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会：承認 3345 号）。

（結果）生検を受けていたのは 6,788 例で St 鉗子群は 2584 例、Sm 鉗子群は 4204 例であった。そのうち Group 2 と診断された割合は、それぞれ 19 例（0.73%）、52 例（1.25%）で、Sm 鉗子群で有意に高かった（ $P=0.048$ ）。検体のサイズ（長径×短径）は、St 鉗子群 $2.82\pm 0.83\text{mm}\times 1.50\pm 0.50\text{mm}$ 、Sm 鉗子群 $2.48\pm 0.80\text{mm}\times 1.38\pm 0.40\text{mm}$ で、長径は両群間で有意差はないものの短径は Sm 鉗子群で短い傾向にあった（ $P=0.088$ ）。また、患者背景、病変の特徴、内視鏡医の経験については両群間に差は認めなかった。なお、両群とも後出血を来した例はなかった。Group 2 と診断され再検査を行った例では、St 鉗子群では再び Group 2 と診断された例はなく、Sm 鉗子群 31 例では 4 例（12.9%）が再度 Group 2 と診断され、引き続き再検査が必要であった。本研究は胃生検には細径鉗子を用いるより標準径鉗子を用いた方が Group 2 と診断される割合が低く、出血リスクも変わらず、再検査による患者への負担が少ないことを示した臨床に寄与する研究論文である。

[審査概要]

学位審査は平成 30 年 9 月 28 日に行なわれた。まず、申請者より本研究の背景と今後の展望も含めたプレゼンテーションが行われた。質疑に関しては①Group 2 例の再検までの期間について、②病理医からみた検体サイズと診断について、③生検個数、採取する深さと診断の関係について、などの質問に申請者は、本研究の限界も含めて適切に回答していた。英文読解力試験では英論文を困難なく抄読でき能力を持つものと判断した。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

申請者は今後、研究を続ける上でも必要な研究能力、専門的学識を併せ持つ人物と評価し、主査、副査は学位授与に値するものと判断した。